
ルパン三世 マルコ・ポーロの研究

降下猟兵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ルパン三世 マルコ・ポーロの研究

【Nコード】

N4941E

【作者名】

降下獵兵

【あらすじ】

マルコ・ポーロの名前は知っていても、その著書「東方見聞録」を読んだ人はあまりいない。ルパンがそのマルコ・ポーロと東方見聞録の謎に迫る異色作？。

ン三世 「マルコ・ポーロの研究」

ルパ

1980年

スウェーデン 初冬のストックホルム

公設、私設併せて70にも及ぶ美術館、博物館を擁するこの
北欧の歴史ある都市の一角。

そこにある重厚な石造りの外観を持つ一つの博物館。

閉館時間をとくに過ぎた深夜近くにもかかわらず、館の内外
は至る所に照明が点けられ、まるでライトアップ

された遊園地のアトラクションのようだ。

しかしその周囲一帯は完全封鎖の上、道という道には多数の
警官と武装した機動隊員が配置されており、一般人

は近づく事さえ許されない。

気が付けば夜空には雪が舞い始めている。

そして時計が午前0時を指す、

と同時に館の配電盤のブレーカーが過電流のためスパークし、
全館内の照明がダウンする。

次の瞬間非常ベルの音が全館一斉に鳴り響き、館内に配置された警官達に緊張が走る。

数秒後、非常電源に切り替わって照明が再点灯すると多数の警官達が一つの部屋に集まってきた。

ショーケースの中の宝石が無くなっている。

「ルパンだ！　ルパンが出たぞ！」

警官達が慌ただしく入り乱れる中、そのどさくさに紛れるように一人の警官がそとその場を後にする。

同じ頃、博物館近くにある駐車場の一角に停めたアルファロメオの中で、峰不二子が合図を待っていたかのようにエンジンに火を入れた。

一方、先ほどの警官はトイレに駆け込むと小窓を開け、便座に足をかけ半身を外に乗り出したところで、

いきなりフラッシュライトを当てられて思わず手をかざし目をかばう。

そして聞こえる聞き慣れた声。

「わっはっはっは、待っていたぞ、ルパン！」

館の裏側にあたるその窓の外には、なぜか多数の機動隊員を従えた銭形が待ちうけていた。

「あらら父つつあん、ご苦勞なこったね。この寒い中、腰は大丈夫かい？　冷えると腰に悪いぜ」

「うるせー、人の腰の心配はせんでいい、自分の立場を心配しろ、自分の立場をな！」

「それにしても・・・」

ルパンは窓から外に飛び降りると変装のマスクを剥がしてその素顔を露にした。

「俺が予告状を出したのが大体20時間前だったのに、まさ

かこんなに早く日本から駆け付けるとは大した

もんだよ」

と感嘆するルパンに銭形はさらに付け加えた。

「ぶわっはっは、それだけじゃねえぜ。」

ワシはこの博物館の立地、構造等から貴様の性格を考えて
14通りの逃走ルートを想定した。

そしてその中から警備状況、気象などを踏まえて最も確率
の高い所を見張っていたのだよ」

そう息巻くなりバツとコートを翻し腰に付けた手錠を手にす
る。

「もはや貴様に逃げ場はない！ 袋のネズミだ！」

銭形の十八番、投げ手錠が炸裂、見事にルパンの手首を捕ら
え、同時に機動隊員達がルパンの体の上に

積み重なって、ルパンは身動きがとれなくなる。

「わっ、わ、重てー、俺を押しイカにする気かぁ！」

その現場近くの道路を、不二子の駆るアルファロメオ130
OGT Aジュニアが静かに通り過ぎて行った。

数日後、ストックホルムからアンカレッジ経由で日本へ向か
う飛行機の機内。

ぼんやりと窓の外の極北の冬雲の海を眺めるルパン、その隣
りの席で鼻歌まじりの銭形、かなり上機嫌。

「父つつあん、そのド演歌やめてくれる？、せっかくの気分
が台無しだよ」

「なんとでも言え、ワシは今この世に生まれた喜びをつくづ
く噛み締めとるんだ。誰にも邪魔はさせんぞ。」

おお、これを幸せと呼ばずに何と呼ぶ」

舞台役者の台詞を真似てふざける銭形。

「へいへい、そうですか。勝手にやってる」
辟易するルパン。

「まあ、そう言うなルパン、貴様だってまだ人生終わった訳じゃないだろうに」

「当ったり前さ、終わってたまるかって」

「いいか、ルパン」

銭形は急に真面目な顔をしてルパンの方を向く。

「貴様の罪は基本的に窃盗だ。

他に器物損壊、職務執行妨害、道路交通法違反などが付加されたとしても、死刑や無期懲役は有り得んものだから、

出所後はまともな職に就くんだぞ」

「ハハハ、何をいきなり真面目な顔で言い出すかと思えば・・」

「例えば学者なんかどうだ」

「フン、俺を書斎が研究室に閉じ込めて本の虫にでもしょうつてのか。冗談はよしてくれ」と笑うルパン。

銭形は話を続ける。

「まあ聞け、ルパン。

貴様程の知能と行動力があれば考古学者、歴史学者には最適だぞ。

歴史学者にでもなつて、今一部で話題になっているマルコ・ポーロの財宝について調べてみるのもいいぞ」

「マルコ・ポーロ？」

「そうだ、マルコ・ポーロだ。どうだ、興味あるだろ貴様なら」

マルコ・ポーロの財宝

東方見聞録の作者として、またヨーロッパに初めて日本を紹介した人として知られるマルコ・ポーロだが、

彼はその旅行中の全てを本に残したわけではない。

彼は旅の途中、とある場所で財宝に関する情報を入手したと言われる。

しかしその事は東方見聞録には記されなかった。
が、間違いなくマルコは財宝の事を旅行中自分のメモに書いている。

そういうウワサは何世紀もの間言われ続けてきた。
マルコのメモは現存しないが、東方見聞録の膨大な情報量を考えれば、メモが確かに存在したであろうことは

容易に理解出来るし、逆にメモ無しではあの書物は完成し得ない事も想像に難くない。

そのメモの写しがあるという。

本当に財宝の事が記されているのか、真偽はいかに。

賛否が別れ、果てはマルコは実は中国へは行っていないという説まで飛び交う始末。

結論は未だ導かれてはいない。

「マルコ・ポーロ、ねえ・・・」そう呟いてルパンは再び窓の外へ目を向けた。

日本 晩秋の成田空港

ルパン三世逮捕の報は既に全世界の人の知るところとなっており、そのルパンが日本に護送されるとなれば、

空港はもはや新聞、雑誌、テレビ等々、何ヶ国もの報道関係者がこった返していて、さながら通勤列車のような

混雑ぶりを呈していた。

その空港に降り立った銭形とルパンは、大勢の報道陣が待ち

うつける到着ロビーを避け、空港関係者が案内する

通用口へ向かった。

そこに待機していたのは一台のパトカーと二人の制服警官。

「ご苦労様です、銭形警部。ルパン三世の護送に参りました」

「おう、ご苦労ご苦労」

銭形は、警官に促されるようにルパンを車に乗せて、自分も乗り込もうとしたところを今度は警官に制止された。

「あ、警部はここでお待ち下さい」

「何だと？」

文句を言おうとする銭形に警官は、

「もうすぐ警察庁長官が直々に警部をお迎えに参りますのでこちらでお待ちいただくように、とのことですよ」

「何！？、警察庁長官が！」

銭形を残して走り去るパトカーの中で、ルパンは笑いをこらえきれずに大笑いし始める。

「クククク・・・ガッハッハッハッハッ！ 見たか父っつ

あんのあの顔。

警察庁長官って聞いてのぼせ上がってやんの」

後部座席で腹を抱えて足をバタつかせながら笑いこぼるルパンをルームミラーで見ながら、運転席でハンドル

を握る警官は、ポケットからペルメルとジッポーを取り出すと後ろに向かって投げ渡した。

「ヘン、いい気なもんだぜ、こっちはフェニックスでバカンス中だったつてのによ。」

こんな寒い日本に来させやがって」

助手席の警官がつけ加える。

「然様、不二子から連絡がなければお主のことなど忘れておったというのに」

二人の警官は、不二子の連絡を受けてルパン奪還に来た次元

と五右エ門だった。

ひとしきり笑い終えて煙草に火を着けるルパン。

「なんだよ、久しぶりに会ったのにその言い方はねえだろ。」

ところで不二子ちゃんは？」

「来てるよ、いつもの所で落ち合う手筈だ」

「あゝあ、怒ってんだろうなあ、ピンクサファイア盗り損ねたもんなあ・・・」

「言わんこっちゃない、不二子と絡むからこんな羽目に合うんだよ」

「まあまあ、そう言うなって。せっかく4人揃うんだ、今夜は呑もうぜ」

人里離れた避暑地の一軒家、ここはルパン達が日本で活動する際に使用する隠れ家の一つ。

「ハイ、不二子ちゃん久しぶりー！」

「なーにが久しぶりーよ、まったく」

「まーまー、そんなに怒らないで、今度埋め合わせすつからさ」

久しぶりに顔を揃えた4人はその日、酒を飲みながら話に花が咲いていた。

いつしか話は護送中の銭形の事へ。

「その父つつあんがさ、俺に刑期を終えて出所したら学者になれ、とか言ってくるんだぜ、真面目な顔して。」

おかしいったらありやしない」

「父つつあんにしては的外れなことを言うな」

「全くだわ、ルパンに学者なんか務まる訳ないじゃない」

「うむ、猿に筆を持たせても書を書くに及ばず、だな」

「ははは、こりゃ傑作だぜ、五右エ門」

「でな、学者になってマルコ・ポーロの財宝でも探せ、だつてさ」

「何？」

五右エ門の表情が一変する。

「マルコ・ポーロの財宝ですって!？」

不二子の目つきが変わる。

マルコ・ポーロの財宝の話に、不二子と五右エ門はそれぞれ別の動機で興味をそそられた。

だが次元は無表情。

「マルコ・ポーロって言やああれだろ、東方見聞録を書いたっていう昔の人」

「そうよ、しかもマルコ・ポーロは商人だった・・・、隠し財宝があっても不思議はないわ」

不二子の目は爛々と輝き出す。

「冗談じゃねえ、マルコ・ポーロはウソつきなんだぜ」

「何を申す、嘘つきとは聞き捨てならんな、次元」

次元の発言に最も反応したのは五右エ門だった。

「マルコ・ポーロは大人から子供まで、誰もが知っている偉人ではないか。拙者も尊敬しておる」

「日本ではそうだろうよ。」

だがその実、あの本の大半は自分が旅したものではないでっち上げなんだぜ。ヨーロッパじゃ有名な話さ」

これに五右エ門が憤慨する。

「イタリア暮らしの経験もあるというのに、東方見聞録を読んだことすらないお主が何を言うか!」

「ほー、じゃあお前は読んだのか」

「無論だ」

「イタリアじゃ、アイスクリームやスパゲッティを最初にヨーロッパに伝えたのはマルコ・ポーロだって言われ

てんだぜ、知ってるか？」

「そ、そんなことは、東方見聞録には書いてない・・・」

「それみる、そんなのでっち上げだって誰にだってわかるさ」

以外な展開に驚くルパン。

「おいおい、まさかお前ら父つつあんの話に乗ろうつてのか？」

「何言つてんのよルパン、財宝よ財宝。黙って見逃す手はないでしょ」

「うむ、財宝はともかくマルコ・ポーロの足跡を辿るというのは意義深い」

「俺は降りるぜ」

「ルパン、まさかあなたまで降りるなんて言わないでしょうね」

「いや、そう言われてもねえ、なんせマルコ・ポーロだもんな」

頭をかきかき天井を見上げるルパン。

その口ぶりに何かを感じ取った五右エ門が尋ねる。

「ルパン、お主なにか知っておるのではないのか」

「まあ・・・、マルコ・ポーロの財宝つてのは初耳じゃあないしね」

「なによ、知ってたの？」

「つつても、かつておじいちゃんが手をつけたことがあったってだけだけどな」

「じゃあもう見つけられちゃったってこと？」

不二子は些か落胆した様子。

「いや、途中であきらめたらしいよ、なんか大変だったって聞いた記憶がある」

ルパンはその仕事がいかに困難で、かつ確実性が低いものを予想していた。

まず、マルコ・ポーロが残したという財宝に関するメモを手する事。

次にそのメモを分析し、東方見聞録の膨大な内容と照合して財宝の隠し場所を特定する事。

そしてその場所へ行き財宝を探索する事。

ただし、東方見聞録に記載されている陸地の大半は現在戦争中であつたり、テロやクーデターが頻発する

政情不安定地帯、国境紛争、ゲリラやマフィアの支配地域、中には国交を断絶して国境を封鎖していたりする

国もあつて、外部から入るのは容易ではないどころか生きて出るのさえも難しい。

しかも結果として得られるものが確かにあるという保証もない。

第一にメモそのものの真偽すら定かではないのだ。

「それで怖じ気づいてるの？ ルパン三世が聞いて呆れるわ」
冷たく言い放つ不二子。

「バカ言え、俺に不可能なんてあるかよ！」

ルパンを煽つておいて今度は一転、物欲しげな表情を浮かべる。

「そうよね、あたしのピンクサファイア置いてきちゃったもんね、博物館に」

「それ言われるとなー・・・よし、じゃあちよっくら調べ
てみるか！ な、次元」

「仕方ねえな、ま、暇つぶしぐらいにはなるか・・・」

とうとう財宝という言葉に目が眩んだ不二子の説得で着手を決定する。

なにせストックホルムで不二子にプレゼントするはずの宝石を盗り損ねた経緯がある。

ルパンと不二子はイタリアへ、次元と五右エ門は中国へ飛んで、それぞれメモの所在を探すことにする。

イタリア ベネツィア

不二子はベネツィアのホテルを拠点に、雑誌記者を装い国内の大学や図書館の研究員から情報集めをする。

そこへフランスへ寄ってルパン一世の記録を持ってきたルパンが合流。

「ハリー不二子ちゃん、調子はどうだい」

「どうもこうもって、なんでこうややこしいのかしら、東方見聞録って」

「まー、古い本だからね」

「全ての原因は初版本がないからなのよ」

不二子の調査結果

・マルコ・ポーロは17歳の時（1271年）、父ニコロと叔父マフェオに連れられ旅に出る。

ベネツィア帰国は1295年。

・1298年、ベネツィアは隣国ジェノバと戦争。

マルコは参戦し（あるいは巻き込まれ）てジェノバの捕虜となる。

獄中で物語作家のルスティケロと知り合ったマルコは旅行中の出来事をルスティケロに話し、ルスティケロはそれを記録していく。

・東方見聞録「世界の記述（Description of The World）」の発行年は不明（おそらく1299～1300年頃）。

なぜなら初版本が現存しないから。

現存する古い時代の本は全て、オリジナルのコピーである
1次祖本をまたコピーした2次以降の写本もしくは

版本で、しかもその全てが同じ内容のものではないからややこしい。

・現存する古写本、古版本はヨーロッパ各地の50余の図書館に分散して140〜150余種。

内容によって大きく6種に分類される。

・同じ1次祖本を元にした2次祖本

1・イタリア系フランス語（中世フランス語） 14

世紀前 現パリ国立図書館蔵（fr1116号）

2・グレゴワール本（宮廷フランス語） 14

世紀

3・トスカナ方言本 130

5年頃の写本

4・ベネツィア方言（ロンバルド語）本 14

世紀前の写本

・ピピノ版（ラテン語） 14

世紀中

この方言本を修道士フランチェスコ・ピピノによってラテン語に訳されたもので最も普及した。

コロンプスが所有していたというのもこの版（現セビリアのコロンプス図書館蔵）。

・別系統の1次祖本から転訳された2次祖本

5・ゼラダ本（トレド版） 14

70年頃

教皇庁枢機官ゼラダがスペインのトレド、カテドラル図書館に寄贈したラテン語訳写本。

6・ラムージオ本 155

9年

ジョバンニ・バチスタ・ラムージオによって14世紀のラテン語写本からイタリア語に訳されたもの。

・東方見聞録のオリジナルが存在しないくらいだから、その元になったメモを見つけるのはほぼ不可能。

しかし15世紀後期のイタリア語版本の一冊のあとがきに、手書きで財宝のことを記したものといわれる

一節が加筆されている。

これはマルコ・ポーロの遺族の所有とされていた版本だが現在は行方不明。

「なるほどね、こりゃ複雑だ」

「でしょ、もうやんなっちゃう」

「つまり、今本屋で売っている東方見聞録はこの6つのどれかを元にいるか、組み合わせてるって事か」

「で、そっちはどうなのよ、貴方のお祖父さんの記録は？」

一方ルパンの持参したルパン一世の記録によると

1932年、イタリア人学者ルイジ・フォスコロ・ベネデッ
ト教授が、スペインのトレドにある教会図書館で、

これまで確認されているものとは別の古写本を発見した。

しかもその写本にはこれまでの東方見聞録にはない記述が多数みられた。

この事が世間で評判になると、昔から言われてきたマルコ・ポーロの財宝のウワサが一気に再燃した。

新しく発見された記述の中に財宝に関する項があると。

だがその後の研究で、それはミラノのアンプロジャーナ図書

館にある1795年発行の転写本の原典である事が

判明。

これがいわゆるゼラダ本そのものである。

内容も財宝とは無縁のものである事が明らかになると財宝熱は急速に収束し、終いにはマルコうそつき説にまで

発展する。

ルパン一世はそうした一連の騒動の中で、マルコの遺族が所有したという一冊のこと、そこに記された手書きの

一節とそれを写したメモが存在を知った。

そしてそれを探し続けたが困難を極め、健康上の理由もあって何も得られないまま諦めざるを得なかった。

「おじいちゃんもこの頃はもう60歳過ぎてるからな・・・」

「結局収獲なしか・・・」

結局、研究者や専門家の間では、マルコの遺族所有とされた本の手書きの一節やそれを写したメモについては、

後の世の人が勝手に書き加えたもので、本来の東方見聞録とは全く関係ないもの、つまり研究対象外だつて

無視しちゃつてるのよ」

「こりやちよつと方向を変えてみる必要があるそうだな・・・」

「

数日後、ルパンはサンマリノのとある一軒のクラブで一人の男と面会していた。

ヨレヨレのトレンチコートを着て白髪混じりの、顎に無精ひげを生やしたその男は裏の世界にも精通した古文書の

ブローカー。

その男から、メモの写しのコピーをヘルベルト・フォン・マイヤーが持っているとの情報を得た。

ヘルベルト・フォン・マイヤー、今まで何度かルパンと宝物をめぐって争ったことがある悪党。

ルパンはさっそくドイツへ向かう。

中国 北京

北京で調査を開始した次元と五右エ門は、一軒の古書店にいた。

五右エ門は真面目に棚一面の古本を一冊ずつ丹念に調べているのに対して、次元の方はまるで観光気分。

そんな五右エ門に店の奥で座っていた店主が声をかける。

「いらつしゃい、お客さん達日本人かい？」

「いかにも」

「マルコ・ポーロのお宝を探してるんだとよ」

「これ！次元！　そう易々と口にするでない」

「気にすんなって、どうせ見つかりっこないんだ」

それを聞いて不適な笑みを浮かべる店主。

「マルコ・ポーロのお宝ですか、ウチにはそんな本はありませんね」。

でもその噂は聞いたことがありますよ、この国にも探してる人がいますね。

もしよろしければそっちの情報に詳しい闇ブローカーを紹介しましょうか」

次元がマルコ・ポーロをウソつき呼ばわりしたのには歴とした根拠がある。

それはマルコ・ポーロが「元」の王たるフビライ・ハーンに気に入られ、17年もの間中国に滞在し、フビライの

特使として中国各地を巡ったというのに、中国の公式歴史書である正史「元史」やモンゴル伝承文献「元朝秘史」

をはじめとして、詳細な記録を残すことで知られる中国のさまざまな歴史書の、どこを探してもその名前を見つめることが出来ないからである。

ヨーロッパでは一介の商人の息子でしかなかった男が、本を出版し話題になり歴史にその名を残したのに対し、

中国で国王の特使まで務めた要人が、名前はおろかその痕跡すら残していないのが同一人物とは到底考えられない。

つまりマルコ・ポーロは中国へは行ったことがない、という説は昔からヨーロッパを中心に少数意見ではあるが

流布し続けている。

五右エ門はマルコ・ポーロ信者の一人としてそれを看過できない。

二人は互いの意見を交わしながら、闇ブローカーがいると教えられた家を目指して胡同の中を歩いていた。

もちろん、後を尾行てくる男達には気付かぬふりをして。

突然、二人はサツと建物の陰に身を隠して撒くと見せかけ、慌てて追ってきた尾行者が角を曲がったところで

次元が男の顎の下から銃を突きつける。

「てめえ、何者だ」

そこへ通りの反対側から尾行者の仲間が発砲してきた。

咄嗟に身を屈めて弾を避けた次元はすぐさま反撃、一発で男

を仕留めた。

そのスキに逃走を図ろうとする尾行者、が五右エ門が斬鉄剣を抜き一斬り、ベルトを斬られてズボンがずり落ち

足が纏れて転倒してしまう。

追いつめられた尾行者は、全て古書店主が金を奪うために仕組んだことを話す。

「ま、待ってくれ、殺さないでくれ。みんなあの古本屋の親父のさしがねなんだ！」

家に閉じこめて金目のものを奪う算段だったんだよ」

「何だと？　じゃあ闇ブローカーってのは」

「そ、そんなやついねえよ、でっちあげだよ」

古書店にとって返した二人が店主を問いつめると、店主はマルコ・ポーロの財宝については、中国でも一攫千金

を狙う者達の間で情報が交換されたりしているようだが、それ以上のことは何も知らないと言う。

二人は調査を続行しようとするが、この銃撃事件がきっかけで警察当局から目をつけられ、常に尾行に付き纏われ、

自由な行動が妨げられるようになったため、何の情報も得られないままひとまず中国を後にする。

フランス　パリ郊外サンクルー

ICPO本部に銭形が現れた。

「ああ、これは警部、どうされたんですか。今日は会議の予定はありませんが」

一階エントランスホールで職員に声をかけられる。

「あ、いや、ちょっと目を通したいファイルがあったものでね」

「何だ、そんなことなら電話でおっしゃっていただければファックスでお送りしたのに」

「なあに、近くまで来る用があったから、ついでだよ」

「そうですか。」

ところで警部、例の件はどうなりました、進展してますか？」

「例の件？ あ、いや、それがなかなか・・・」

「そうですね、難問ですからね。」

そういえばあの後、その少年から3、4回電話があったそうですよ。

みんな最初はただのイタズラ電話だと思ったようで、なにしろまさか警部がその件で動くとは誰も知りません

でしたからね。

その後の電話で警部のことを伝えたと少年も安心したそうですけど。

で、犯人は逮捕されたんでしょうか」

「さ、さあ、ワシは何も聞いておらんが・・・」

「そうですか、まったくフランス警察は何をやっているんだか」

「・・・」

次に銭形はパリ警視庁本部を訪れ、一つの事件に関するファイルに目を通す。

事の起こりは約一ヶ月前、パリ国立図書館の常席研究員アンリ・デ・シャン氏殺害に始まる。

この件に関しては目下パリ警視庁の捜査本部が捜査中だが、

デ・シャン氏の息子ジャン・リュックには思う

ところあってICPOに直談判にでかけることとなる。

ジャン・リュック少年の主張はこうだ。

父アンリ・デ・シャンは予てからマルコ・ポーロの東方見聞録に疑念を抱いており、マルコ・ポーロは中国へは

行っていないと考え、その旨を研究論文として発表する予定でいた。

しかし当然のようにマルコ・ポーロ擁護派を名乗る人達から反感を買い、中には自宅に殺人をほのめかすような

脅迫文を送りつけてくる者まで現れた。

よってデ・シャン氏殺害の犯人は、父の説に異論を唱えるマルコ・ポーロ支持者であるというもので、捜査本部

はその線も踏まえて捜査に当たっているが、現在は容疑者を絞り込んでいる段階。

ではなぜジャン・リュックはICPOに出向いたのか。

銭形はジャン・リュック少年に会いに行く。

パリ市内の静かな住宅街の午後。

石畳の歩道を俯いてとぼとぼ歩く一人の少年は、下校中か、鞆を背中に背負っていた。

「キミはジャン・リュック・デ・シャン君だね」

後ろから声をかけられ、驚いて振り向く少年。

「おじさん、誰？」

「ワシはゼニガタという者だが」

少年はその珍しい名前には聞き覚えがあった。

「あ・・・、ICPOの人ですね、電話で聞きました」

「ああ、まあ・・・そうだ」

その、疲れたような少年の顔に笑みがこぼれ、血色が差してくる。

「誰か、見つかったんですか？」

「ワ、ワシは犯人を捜しているのではない、それはパリ警視庁の仕事だ」

「知っています、ぼくのお願いした人を探しているんですね。」

で、見つかったんですか？、お父さんの説を証明してくれる人は」

「君は、父さんの研究を知っているのかね」

「もちろんです、よく家で話を聞きました。」

マルコ・ポーロは中国には行っていないんだって、いつも言っていました」

ジャン・リュックはICPOに何を望んだのか。

彼は父の学説が正しい事を証明してくれる人物を探していたのだ。

「どうして君は、そうまでして父さんの学説を証明したいのかね」

「だって・・・」

少年は下を向いた。

「父さんは間違っていない・・・、何も悪い事はしてないんだ。」

それなのに・・・これじゃまるで父さんが生きていた意味がないじゃないか！」

彼にとつては、父の死＝父の学説の否定＝父の存在そのものの否定に繋がっていく。

したがって父の説が正しければ、それは父の生きた証なのだ。かなり強引な論理だが、9歳の少年ではそんなものか。

銭形は少年に最善を尽くすと言い残してパリを後にする。

銭形の変装を解きながらルパンは悟った。

ルパンがストックホルムの博物館に予告状を出した時、銭形はこの一件でパリに居たのだった。

それであんなにも早く現場に現れ、周到に準備出来たわけだ。

ドイツ バイエルン州

ミュンヘンから約50km、ローゼンハイム郊外キムゼー湖畔ランバッハにある別荘にヘルベルト・フォン・

マイヤーは滞在していた。

マイヤーは各国のマフィアやシンジケート、裏社会に顔が利く。

もちろんルパンの顔もよく知っている。

湖を望む広い敷地の木立の中にあるログハウス風の木造2階建ての住宅、ドアを3回ノックすると中から

”いかにも”という風体のサングラスにスーツ姿の男が現れた。

「誰だ、お前」

「こんにちは、わたしはガムラン・ガラームと申します。インドのカルカッタで宝石のぶろくを

やってます。

こちらにミスター・マイヤーがいらはると聞いてきたのです。

是非お会いしたいのですが」

応接間に通され、暫く待つとそこへマイヤーが入ってきた。

「おお、あなうたがミスター・マイヤーですか、わたしは

ガムラン・ガラームと申しまゝす。

どぞよろしく」

「インドからわざわざお越したそうで、よほど大事なお話のようですね」

ソファアーにふんぞり返るマイヤー。

白い高級ブランドスーツに身を包み、クールに笑うマイヤーは、低い声で穏やかに、落ち着いた口調で話して

いるが、その態度はいつものことながら高圧的だ。

「そのとおり、マルコ・ポロのお宝の話です」

「マルコ・ポロ？ ああ、あの噂ですか」

「あなゝたがマルコ・ポロのメモのコピーを持ってゝると聞きまゝして、是非ともお譲りいただきたい」

「ほー、私がそのメモを持っていると、どこで知ったのですか」

「ノンノン、それは言えませゝん。わたゝしにも企業秘密ありまゝす。

5万ゆゝえすドルお支払いしまゝす。どですか？」

「5万？・・・、ほー、5万ですか」

「はい、それだけの値打ちのあるものだと思つとりまゝす。で、そのメモは今どちらに・・・」

「・・・丁度いい、今この別荘にあるんですよ。確か金庫の中に保管してあつたはずだが」

「おゝ！、そうですね！ それはそれはグッドです」

「実は、私もあのメモは持て余してましてね、なかなか難しい」

マイヤーは金になることなら何でもする強欲な男である。

しかも殺人、強盗、密輸、紙幣の偽造、株のインサイダーから保険金詐欺まで、そのためには手段を選ばない

冷酷で残忍な男でもある。

トレジャーハンティングは彼にとって実益を兼ねた道楽のよ
うなものでもあるのだが、いかんせん短気な性格

ゆえ、長期に渡る地道な調査や検証などは他人に任せてその
果実だけをむさぼる、というのが常である。

もつとも、最後の最後でルパンに先を越されたりして、成功
したためしはほとんどないのだが。

そんな彼がマルコ・ポーロのメモのコピーを持っていたても、
真剣に調査する気力も知識もないのだから、全くの

宝の持ち腐れという訳だ。

マイヤーは考えた。

このインド人が何者かは知らないし、どこまで信じてよいも
のか判断しかねる部分もあるが、あの紙切れが5万

ドルに変わるのならそれに越したことはない。

しかもこの男とのコンタクトを切らさなければ、いずれはマ
ルコ・ポーロの財宝も手に入るかも知れない。

「ところで、あなたは件の噂を信じているのですか？」

「おゝ、何をボヤけたことを仰いますやら、そうでなけれ
ばお金出しません。」

マルコ・ポーロは偉大な人物です。

偉大な人物は皆お宝持つてます。これ真理ですよ
少し時間を置いた後、マイヤーは決断する。

「よろしいガラムさん、ではあなたにお譲りしましょう」

「おゝ、それはありがとうございます。」

ですがお金は今持つてませう。
これからお金を用立てに行つて参りますので、また後日
お伺い致します。」

ガラムは立ち上がつてマイヤーと握手するとそそくさと別
荘を後にした。

そして深夜、マイヤー邸に侵入したルパンはあっさりメモの入手に成功。

翌日、開かれた金庫に残る一枚のカードを見て、ルパンによってメモが盗まれた事を知ったマイヤーは激怒する。

「何をやっている、ハンス！ 即刻部下にルパンを探させる！ ヨーロッパ全土だ！ 絶対逃がすな！」

「は、はい、ただちに！」

「くそー、あの忌々しいルパンめ・・・、インド人などに化けおって・・・」

ここでマイヤーは一つひらめいた。

「そうだハンス、警察を呼べ、被害届けを出すんだ」

「は？警察ですか？」

「そうだ、警察の情報網を使ってやれ。いつも迷惑をかけられているんだから、たまには利用してやれ」

「はい、かしこまりました」

被害届けを受理したドイツ連邦警察からICPOへ申請されたルパン三世に関する情報の照会依頼は、その日のうちにルパン専従捜査官である銭形へも報告され、銭形は直ちにマイヤー邸を訪れた。

ICPOでも名の知れた犯罪者であるマイヤーに対し銭形は開口一番に告げる。

「いいかマイヤー、ルパンには一切手を出すな、ルパンは我々が逮捕するんだからな！」

マイヤーはヘラヘラ笑う。

「俺が何をするって言うんだい銭形警部、自分はただの被害者だよ。」

被害届けを出した以上、この件は警察に任せるのが常識でしょ」

だがその目は笑っていなかった。

チュニジア チュニス

チュニスの旧市街、下町にある安ホテルで、ルパンは中国から戻った次元、五右エ門と合流。

「おう、どうだった、ルパン」

ルパンがドアを開けて部屋に入ると、ソファで横になってタバコを燻らしていた次元が声を掛ける。

「こっちはバツチリさ、で、そっちは？」

「収穫なし。 散々さ」

「あー、やっぱりか、そんなこっちゃんかと思ってたよ」

「だが、我々以外にもお宝を信じて探している者がおるらしい事は分かった」

五右エ門がつけ加える。

「へー、物好きはどこにでも居るってか」

そこへ不二子がマルコ・ポーロの遺産目録を持って飛び込んできた。

「ルパン、見つけたわよ、新しい資料」

「資料？」

「そ、マルコ・ポーロの遺産目録よ」

「マルコ・ポーロは1254年生まれ、1324年没。

遺言状は1324年1月8日に作成され、今もベネツィアのマルコ・ポーロ図書館に保管されているわ。

でも内容は、

・ポーロ家の墓があるサン・ロレンツォ修道院をはじめ、
その他教会、修道院、マルコが所属したギルド等への

寄付。

- ・知人に貸した金の帳消し。
 - ・タタール人召使いペトルス（ペーテル）を自由にする。
 - ・妻ドナータと3人の娘への財産の配分。
- 等が記載されているだけで、特に重要と思われるものはな

いわ。

これ、そのコピーよ」

「ふーん、確かに重要なものはなさそうだな」

「問題はその額だ」五右エ門が言う。

「そつちも調べたわ。」

イギリスのマルコ・ポーロ研究家A・C・ムールと、フランスの中国学者ポール・ペリオの計算によると

マルコの財産総額は、

慈善的寄付	1	400	リラ
妻ドナータの年金	3	000	リラ
目録上の財産	6	865	リラ
不動産	3	500	リラ
合計	14	765	リラ

となり、当時としても人並み外れた高額なものとはいえない
いそうよ」

「その、目録上の財産つてのは何だ？」

リアルに金額を呈示されると次元も黙っていらなくなる。

「それがこれよ」

不二子は手にしていた数枚の用紙をテーブルの上に置いた。

「マルコ・ポーロには、ファンティーナ、ベレーラ、モレッツ
タという3人の娘がいたのよ。」

財産目録は1366年7月13日付け裁判記録にあるわ。

長女ファンティーナが未亡人となり、亡き夫マルコ・ブラガディンの家族と遺産をめぐって争った際作成された

ものよ。

目録は、マルコ・ポーロが臨終間際に贈った遺産を箇条書きにしたリストで、内容は家具、シーツなどの実用品

がほとんどを占め、贅沢品はなく、財宝と関係しそうなものもないわ」

「なんだやっぱりだめか」

次元は少し口惜しそうに言うと、スコッチのグラスに手をやる。

「それから、マルコと一緒に旅をした父ニコロや叔父マフェオの遺言状等も調べただけど、どの資料の中にも

財宝の存在を裏付けるものは一切出てこなかったわ」

それまで黙って聞いていたルパンが、資料を見返しながら言った。

「まあ、この手の資料は専門家も調べてるだろうし・・・、その専門家が財宝なんか無いって言うんだから、この

資料にそれらしい事が書いてないとしても何の不思議もないさ」

不二子は折角の苦労を否定されたような気がしてムツとした。

「じゃあルパン、あなたの成果を見せてよ」

ルパンが入手したメモのコピーといわれるものは古いイタリア語で書かれたものだった。

「その町から南西に10〜13リーグ程行ったところに名も無き山がある。

山には古代の城塞が廃墟となっており。

そこは今は盗賊団の住み処となっていて誰も近付けない。
しかし、命の危険を冒してもなおそこへ向かう旅人や商人
達は後を絶たない、と町の老人に聞いた。

なぜそんなことをするのか、老人は教えてくれなかった。
行ったら誰も帰ってこないのだと。

何かある。行ってみたい。これは商人としての勘だ。」

「これじゃあ何も分からん」次元は吐き捨てた。

「リーグって何よ？」

「当時の距離の単位だよ、1リーグは今の単位で4マイル、
約6Km強だね」

「しかしメモとはいえ、本とは明らかに文の書き方が違う」
と五右エ門が指摘する。

「さすが五右エ門、読んだことのある人は言うことが違う。
だがそれは、あの本を書いたのがマルコ・ポーロでなくル
ステイケロだからだよ」

「ルステイケロって何者なのかしら？」

「ルステイケロはロマンス（中世騎士物語）作家、今で言う
恋愛小説家みたいなもので、

イギリス国王エドワード一世（在位1272～1307）
が王子だった頃から英国王室のお気に入り作家だった。

アーサー王と円卓の騎士の伝説を題材にした本が今でも2
冊残っているらしいよ。

東方見聞録は、基本的に訪れた町々の民族、宗教、特産品
通貨などを紹介する旅行案内書のような、無味乾燥

とした文章で綴られているんだが、所々に地元の人に聞い
たという伝説のような話が織り込まれていて、そこで

物語作家ルステイケロの手腕が発揮されている、というの
は研究者の誰もが認めるところだよ」

ルパン達は、入手した文章が東方見聞録のどの辺りのことを書いたものか検証を始める。

「でも東方見聞録の内容の違う多数の版全てを比較検討するのは無理だわ」

と不二子は主張するが、ルパンには考えがあった。

「東方見聞録は写本、版本が繰り返される度に、間違いや付け足しが増えていく傾向があるのさ。

内容の違う版がいくつも存在するのはそのせい인데けど、その原因はペルシャ、モンゴル、中国等、当時の

ヨーロッパ人にとって聞き慣れない地名や名詞が多かったために起こるスペルミスがその一因さ。

グーテンベルクによって活版印刷が実用化されて普及し始めるのが15世紀だから、それまでは手書きで書き

写すのがごく一般的な方法だったからな。

さらに東方見聞録のオリジナルは、おそらく中世フランス語で書かれたと推測されている。

筆者ルステイケロが書いた他の作品でも分かるように、それが彼にとって一番自然な言語だったからだ。

けど当時の中世フランス語は今のようには完成されたものではないため、イタリア語的な部分を含んでおり、

これが翻訳者を悩ませ、結果として誤訳を生じさせた側面もある。

また、15世紀のものと思われるゼラダ本や、16世紀のラムージオ本には、明らかにマルコ・ポーロ

(ルステイケロ)が書いたのかどうか疑わしい部分がある。ロシアに関する長つたらしい説明なんか他の版には全然出てこないからね。

それに、そもそもマルコ・ポーロの財宝説が囁かれ始めたのもそのラムージオ本が原因だと考えられる。

その本の中で、ポーロ一行がベネチアに帰国した時纏っていたボロボロの異国風衣装の裏地に、たくさん

宝石が縫い付けてあったと書かれているんだよ。

これはラムージオ本だけにしかない記述だから、別人の筆によるものだろうけどな。

まあ、マルコ・ポーロが存命中に再版された可能性もあるから、本人が加筆したとも考えられるけど、

必ずしも全部が全部そうとは言い切れない」

「つまり、最も単純なものが最も祖本に近いと解釈すれば良いのだな」

「じゃあパリ国立図書館にある本のことね」

「まあね、あるいはそれは簡略版で、オリジナルは他の物なのかも知れないけど、単純な方が調べ易いでしょ」

ここから 数日間に及ぶルパンの詳細な分析が始まる。

東方見聞録は序文と本編で構成されている。

序文は、マルコの父ニコロと叔父マフェオの2人がカラコルムまで行った1回目の旅と、マルコを伴って3人で

中国まで行った2回目の旅の全体を簡潔にまとめており、

本編は、その2回目の旅でマルコが各地で見たり聞いたりしたものを、おおよそ訪れた地方順に紹介していく

形をとっている。

その本編の内容は、大きく分けて3つに分割できる。

1 ・ベネツィアから中国へ 中央アジアの記述

2 ・中国国内

3 ・中国からベネツィアへ 南海航路

この中で、中央アジアの記述（この時期ほとんどの地域はモンゴル系の支配地域）に関しては、マルコ・ポーロと

ほぼ同時代に旅行したフランススコ会修道士プラノ・カルピこと、同じフランススコ会修道士ギヨーム・ド・ルブルクがそれぞれ記録を残している。

二人が旅した時期には多少のずれがあるが、いずれもローマ教皇イノセンス四世の命によって派遣された、言わば

公式の宣教師だ。

また南海航路についても、マルコより少し後（数十年後）のフランススコ会修道士ポルデノーネのオドリコや、

アラブ人旅行家イブン・バトウータの旅行記があるので、検討は比較的容易だ。

しかし、全体の半分以上の頁をさいて記録された中国国内に関しては、幾つもの疑問点があり、これこそが

マルコ・ポーロは中国へ行っていない、という説の揺るぎ無い根拠となっている。

まず何といつても、初めて目にする誰もが驚かすにはられない巨大建造物、万里の長城について全く触れていない事だ。

マルコが訪れた当時の万里の長城は、現在のものとは構造や規模が違うものの、確かに存在はしていた。

なにせ2000年も前の、秦の始皇帝の時代に建造が始まったくらいだから。

（註：現在ある長城の大部分は元の後、明代になってから建造、完成したもの。）

他にも、当時のヨーロッパ人にとっては非常に興味深いはずの漢字、お茶、木版印刷、纏足などの記述がないのはなぜか。

同時代に中国を訪れた他の人の記録には残っている。

あるいは本を発行する際に、面白くないという理由で割愛されたのかも知れないが、残された部分の内容、容量を

考えれば、文章の一行くらいあっても不思議はないはずだ。

さらに、マルコは17年間も中国にいたというのに、中国語、あるいはモンゴル語の地名を殆ど覚えられなかった

というのも謎。

序文の中で、マルコはまたたく間にモンゴル語を習得した、と言っている。

しかしどう考えても中国語と漢字には全く無知であると言わざるを得ない。

東方見聞録に使われている中国国内の地名は、ペルシャ人の使うペルシャ語やトルコ語の地名を元に書かれている。

これは、ポーロ一行がペルシャ人通訳を使っていたからだ、と解釈すれば説明がつくが、それを証明するものは

ないし、何より17年も住んでいたのであれば、多少なりとも中国語に馴染むことは出来ただろうし、地名を

覚えるのも苦ではないはずだ。

また、当時のヨーロッパでは想像する事すら出来ないであろう紙のお金、つまり紙幣に関していろいろと詳しく

書いているが、そこに印刷された漢字については全く無視している。

そして最大の疑問は、ポーロ一行の記録が中国側の歴史書には一切残されていないことだ。

当時すでに中国を訪れたヨーロッパ人は他にもいた。

中には中国国内にカトリックの教会を建てた宣教師までいたほどに。

そんなヨーロッパ人達の中で、ポーロ一行は国王フビライとの謁見を許され、祝宴まで共にした。

しかも、マルコ・ポーロは王直属の使節として中国各地を視察し、その結果報告は地元官僚のそれより重要視されたともいう。

果ては地方反乱に軍事参謀として同行し、作戦の指示までする始末。

まあ、これは明らかに史実と異なっていることが証明されているけどね。

これほど王に気に入られ、破格の待遇を受けていた者の記録がないというのはあまりに不自然だ。

「プレスター・ジョンの話はどうなの？」

不二子が聞く。

「ああ、あれは当時のヨーロッパ人が信じていた伝説だから、マルコ自身もそう思いこんでしまっただけだろう。

もしかしたら、それをつけ加えることで大衆にアピールして、本の信憑性を高めようとしたのかも知れない。

どっちにしても事実とは違うわけだ」

「って言うかあんだ、どうにかしなさいよ、その無精ヒゲ。みっともない」

「あ、いやまあ、ついね、ドウツフツフ・・・」

コーヒーカップを手に、頭をかいて照れるルパン。

ルパンはここ数日の間、ホテルに缶詰で東方見聞録と資料の分析に没頭していたせいでヒゲは伸び放題、もう

夕方だというのに未だにバスローブ姿のままだった。

「プレスター・ジョンって何者だ？」

「カトリック信者がいると信じていた救世主の名前だ」

次元の質問に答えたのは五右エ門、それをルパンが補足する。

「イスラムとか、モンゴル人とかの異教徒に攻められ続けた当時のカトリック教徒は、東から救世主が来ると

信じていたんだよ。

そいつの名前がプレスター・ジョンだ。

旧約聖書に出てくるキリストの誕生を祝福したという東方の三博士の子孫だと言われてる伝説上の人物だよ。

ビザンチン皇帝に宛てたプレスター・ジョン直筆の手紙つてのが今でも保存されているらしいが、空想上の人物

だと考えて差し支えないだろう。

ただ、当時の人は希望を込めて実在すると信じていたわけだ。

マルコ・ポーロが中国にいたと主張しているキリスト教徒は、ネストリウス派の教徒だと分かっている。

ネストリウス派はローマカトリックからは異端とされたためヨーロッパを離れ、イスラム、インド、中国圏の

支配者達と親交を持ちながら東へ東へと勢力を拡大していた。

そうしたネストリウス派の居住地域を、伝説のプレスター・ジョンの国と混同したんだろうな」

「だから言っただろ」と次元。

「マルコ・ポーロは中国には行っていないんだよ」

「そんなはずはない」と五右エ門は反論する。

マルコ・ポーロが中国を訪れていたことを証明する歴史書があるのだ、と。

「フビライの従弟でイル・ハン国（現イラン）の王、アルグン・ハン（在位1284～1291）の妻ボルガナが死亡。

彼女の遺言により、後妃には彼女と同じバヤウート族から

選ばれることとなった。

アルグンに依頼されたフビライはコカチン姫（当時17歳）を選出。

そして1290年末、コカチンはイル・ハン国へ嫁入りの旅に出る、という話があるのだが・・・。

マルコ・ポーロは東方見聞録の序文の中で、彼女の旅に同行し、イル・ハン国の都タブリーズまで送り届けたと言っているのだ。

これと同じ事が中国の歴史書「経世大典」（全88巻、1331年に編纂された勅撰政書）に記録されたが、明時代に散失してしまった。

しかし、その一部が「永楽大典」（1403～1408年編纂の百科事典）に収録されており、コカチン姫の嫁入りの件も記されている。

また、ペルシャのユダヤ人歴史家ラシード・アッディーンが、イル・ハン国の王オルジェイトウ（アルグンの後王、在位1304～1316）の命を受けて1306～1307年に書いた世界史「集史」の中にも同一の内容があるのだ」

「その通り、ただし・・・」

シャワールームで鏡に向かい合いヒゲを剃りながらルパンが付け加える。

「どちらの書物にもマルコ・ポーロの名前はもちろん、西欧人が同行したという記述は一切ない。

つまり、マルコ・ポーロが遙か中国まで行ったという決定的な物証は、自身の残した本以外、何一つ残されていない訳だ」

「・・・・・・」

これには五右エ門も返す言葉がない。ソファの上で胡座をか

いたまま腕組みをして黙り込んでしまった。

「しかし、作り話にしちゃ良く出来た方だぜ。

アガサ・クリスティー並みに売れるとは思えんけどな」

次元が皮肉を込めて言う。

「そうね、マルコ・ポーロなんて人は元々実在せず、作者ルステイケロが作り上げた架空の人物だ、なんて言う

学者もいるくらいだから」

と不二子が肩を窄めて首を振る。

「バカな！ 東方見聞録には史実と一致する記述が多数あるのだ。

作り話などであるうはずがない！」

五右エ門が語気を荒げた。

「そう、作り話なんかじゃないさ」

着替えをして小ざつぱりしたルパン、シャワールームから出てきてシヨルダーホルスターを締めながら話を続ける。

「でも作り話と実際旅をしたかは別問題だよ」

「どういう意味よ、何が言いたいのか？」

「わざわざ旅をしなくても、あの本を書くのは可能だったってことだよ」

「ならば・・・」と五右エ門。

「マルコ・ポーロが中国にいたという17年間、いやベネツィアを離れていたという24年間彼は何処で何を

していたというのだ」

「それは誰にも分からんさ、記録がないんだから。

ただ、ひとつの可能性として、マルコの父ニコロには兄弟がいた。

マルコと一緒に旅をしたという叔父のマフェオともう一人、マルコという名の伯父がいたんだ。

彼は通称「大マルコ」と呼ばれて東方見聞録の著者マルコ・ポーロと区別される。

死亡時期からして多分この大マルコが長男だったんだろう。このポーロ3兄弟はみな貿易商人だった。

大マルコはコンスタンチノーブル（現イスタンブール）と、黒海のクリミア半島にあったソルダイアという町に

それぞれ一軒ずつ家を持っていた、というのが彼の遺言状で分かる。

おそらく彼ら3兄弟は、この2ヶ所を拠点に商売していたんじゃないかな。

とすれば、マルコ・ポーロがベネツィアを離れていた期間、ずっとこの2ヶ所のどちらかで商売の修行をしていた、とは考えられないか」

「な、何と！」

「大胆な推理ね」

驚く五右エ門と不二子。

「コンスタンチノーブルとソルダイアは共に東西貿易の一大拠点だった。

そこでたくさんのお商人達と会っていれば、一般人が知らない東の国の情報も容易に手に入っただろう。

遙か異国まで命がけて旅をする行商人にとっては、地方の情報はそれこそ命を左右する重要なものだったから、

商人同士の情報交換も盛んに行われていたはずだし、そのための情報誌や旅行案内書なんかもあったのかも

しれない。

実際、東方見聞録で描かれているいろんな地方の描写は、その地方の人種、宗教、特産品、市場の活況、特異な

習慣や文化等々、いかにも商人マルコらしい着眼と云えはらしいが、言い換えればそういう情報しか入手出来

なかったとも言えるんだよ。

要するに、あの本に書かれている内容は、その地方を行商する商人にとっては知っていて当然なことばかり

だってことになる。

それでも、それ以外のヨーロッパ人にとっては、すぐには信じられない驚愕すべき内容ではあつたろうけどね」

「さすがルパンだ、その方が説得力があるぜ」
相棒を讃える次元。

「お主は本気でそう思っておるのか、ルパン」
複雑な表情を浮かべる五右エ門。

「そういう見方も出来るってことだよ、かなりの極論だろうけどね。」

でも俺自身はそう思いたくはないんだ。
それじゃつまないだろ。

本当のことは誰にも分からないよ、新しい記録でも見つからない限りはね」

「なあんだ、じゃ財宝はどこにあるの？」

不二子は何を信じていいのか分からなくなり途方に暮れたような顔をする。

「そのメモだって本当かどうか分かんないじゃない、ねえルパ・・・」

不二子はルパンに意見を求めようとするが、突然五右エ門が無言でそれを制止した。

外の様子に異変を感じたからだ。

斬鉄剣を手に構える五右エ門。

室内は会話が絶え、一気に緊張感に包まれた。

すぐさまルパンと次元は銃を手にしてそれぞれ窓の側へ張り付き、そつと様子を窺う。

窓の外に見える土煉瓦作りの建物の角角に、数人の黒服の怪

しい男達の姿が見えた。

どうやらホテルは包囲されているらしい。

「チエツ、マイヤーのヤツもう嗅ぎつけやがったか、思ったより早いな」

「銭形の父つつあん並みの嗅覚だな」

「その父つつあんを利用したんだろうぜ」

「なるほど、ヤツもバカじゃねえってか」

ルパンは新聞報道でマイヤーが被害届けを出した事を知っていた。

とすれば、いずれ銭形が現れることも予想の範疇だ。

「ルパン、長居は無用だ」

五右エ門は部屋を出る支度を調えていた。

「じゃあ、いっちょやるか」

そう言つて部屋のドアを開けて廊下にでた次元は、廊下の端の階段を上がつてきた黒服の男と目が合う。

「いたぞー！」バン！

男は一声上げながら発砲。

すかさず、弾を避けた次元はドア越しに反撃、男を仕留める。ルパン達が廊下を走つて階段まで行くと、その下には何人も黒服や地元民の格好をして武装した男達が、今にも階段を上がろうとしていた。

ルパン達とマイヤー一味の銃撃戦が始まる。

だが、数で圧倒される。

「くそっ！ 一体何人いやがるんだ。弾がもたねえ」

「多勢に無勢か」

「おいルパン、おめえマイヤーを怒らせるようなこと何か言つただろ。服のセンスが悪いとか何とか」

「あいつのセンスは悪くないよ、ただ似合つてないだけさ」

「ルパン、冗談言っでないで何とかしてよ」

「いやー、もうそろそろだと思っただけだなあ・・・」

そこへ登場してきたのが多数の地元警官隊を連れた銭形。

「おのれマイヤー！ 勝手なマネしおって！ かかれ！」

今度はホテルの玄関を挟んでマイヤー一味と警官隊との大規模な銃撃戦に発展する。

近所の住民や道行く人々は突然のことに驚き、我先にその場を離れようと右往左往し、その周囲一帯は大混乱に陥る。

攻撃が手薄になったのを見定めたルパン。

「よし、チェックアウトだ」

そのどさくさに紛れてルパン達は部屋へ戻ると窓から飛び降り脱出、見事逃走に成功する。

UAE（アラブ首長国連邦） アブダビ

アブダビの海岸を北へ向かいながら走る車の中で、次元に今後の方針を聞かれたルパンは自分の考えを話す。

「なあルパン、こんな所まで来てこれからどうする気なんだ」

「どうするって、財宝探すんだよ」

「おいおい本気かよ、あれはガセじゃなかったのか」

「ガセだなんて誰も言っでないって。」

って言うっても、マルコ・ポーロが中国まで行ったという確証がない以上、中国での財宝探しには無理がある。

無論、帰路の南海航路も同様だ」

「つまり、一番可能性が高いのがアラブ周辺ということになるってわけね」

助手席の不二子が言う。

「実は、マルコ・ポーロは東方見聞録出版後も商売を続けており、何度かアラブ方面に行商の旅に出ていたらしい」

「じゃあマルコ・ポーロ自身も財宝探しをやったのね」

「かもね・・・」

そこで、メモの内容から財宝の場所を推測するとなれば、そのヒントになるのは盗賊団の隠れ家になっている

廃墟、という言葉。

そこから東方見聞録の本編で、山賊カラウナスについて語られるカマデイという都市が浮かび上がってくるが、

レオバール平原にあるという以外、マルコがカラウナスに追われて逃げ込んだカノサミルという町も含めて、

その位置の特定は難しい」

「難しい？」

「場所が分からないんだよ。」

名前が変わるんならまだしも、町自体が消滅してしまっているんだから。

実際、後の探検家、研究者等が何人もマルコ・ポーロの行程を再現しようとして本の通りに旅を試みたが、

誰一人としてそれを成し遂げた者はいない。

みな途中で道に迷ってしまうのは、その場所が何処にあるか分からない町や都市が登場するからさ。

中国国内に至っては、ある地点から次の地点まで、本に書いてある日数では当時最速の移動手段だった馬を

使っても移動するのは到底不可能だと判明した箇所もあるくらいだよ。

次に思いつくのは、有名な「山の老人」の話が出てくるムヘレットだが、これも範囲が広く、一つの場所を特定

するのは至難の技だ」

「何だそれじゃ何処探すってんだよ。アテがあるんじゃないのか」

「まあまあ、ならば視点を変えて考えてみよう。

マルコ・ポーロが財宝の在処を知ったとすると、少なくともその地にある程度の期間滞在したのではないか。

貴重な情報を得るためには、それなりの信用が必要だからだ。

東方見聞録の本編中で、マルコが長期滞在したと言っているのは3ヶ所ある。

1．パミール高原近くのバラシヤン国

現アフガニスタン北部バダクシヤン州で、一年間病氣療

養。

2．中国 甘州 カンフチュー

現甘肅省張掖県、まる一年ある用件のため逗留（委細は省略されている）。

3．サマトラ国

現スマトラ島北東部、悪天候で5ヶ月間足止め」

「てことはアフガニスタンへ行くんだな」

ルパンの言葉を聞く限り、次元のこの結論は間違っていないのだが、ルパンの返答はそうではない。

「いんや、アフガンへは行かないよ」

「何？」

「しかし他の2ヶ所は、いずれもお主が探索地としたアラブ以外の土地ではないか」

次元と同様、五右エ門もルパンの言葉には解せぬところがある。

「そうなんだ、でもあの本にはバダクシヤン州っていうだけで、町も都市も名前すら出てこないんだから

探しようがない。

それにあそこには今ソ連軍が進駐してんだぜ、危ねえった

らありやしない。(註)

(註：アフガン侵攻

1978年、アフガニスタンで革命が勃発、共産党政権が樹立されるが国内各地で反政府暴動が起こる。

隣国であるソ連(現ロシア)は共産党政権を支援するため1979年軍事介入、事実上アフガニスタンを支配下に置く。1989年完全撤退まで紛争状態が続く。)

だからこの3ヶ所は除外する。

でも俺は最終目的地を決めているよ」

「どこなんだ、そこは」

「タブリーズさ」

「タブリーズ？」

「何でタブリーズなの？」

少し怪訝そうな顔をする不二子。

「まあ、おいおい話すよ」

「タブリーズ……、砂漠越えか……」

ボソツと呟く五右エ門の言葉を聞いて即座に不二子が反応する。

「あたし、砂漠はいやだからドバイで降ろしてちょうだい」

「えー、じゃどこ行くの？不二子ちゃん」

「そうね……、モルジブでも行こうかしら。後はまかせ

るわ」

ドバイの空港で不二子は車を降りる。

ルパンは名残惜しそうにその背中を見送りながら次元と五右エ門に言う。

「行くぜ、タブリーズへ」

イラン 南端の町バンドル・アッバース

深夜、ホルムズ海峡を越え、バンドル・アッバースへ上陸したルパン、次元、五右エ門。

砂浜に乗り揚げた小型木造船から手際よく次元がダッチの四駆車を降ろす様子を見ながら、ルパンは気を引き

締めるように言う。

「さーて、問題はここからだ」

「問題って、何かあるのか？」

「なーに言ってるんだ次元、ここは今戦争の真っ最中なんだぜ。まともに走ってたらタダの標的だよ」

「ま、確かにな。爆死だけは勘弁だぜ」

「では、どうやってここからタブリーズまで行くつもりなんだ」

物資を積み込んで、走り出した車上で質問する五右エ門。

「まあ見てなって、ちゃんと考えてあるからさ」

イラン・イラク戦争真っ只中のイラン国内の移動は夕方から夜に行わざるを得ない。（註）

（註：イラン・イラク戦争

1978年、イラン革命が勃発、イスラム教の宗教指導者ホメイニ師を中心としてパーレヴィ王朝を打倒。

イスラム教の教えに基づく国家体制が樹立すると、それまでの欧米指向政策を支持してきたアメリカは反発し、

経済制裁を発動し世界的な石油危機へ発展（第2次オイルショック）。

ソ連のアフガン侵攻も、この革命がアフガニスタンへ飛び火

することを阻止しようとしたためとも言われる。

1980年、革命の余波の中、サダム・フセイン率いる隣国のイラク軍がイランに侵攻、両国は戦争状態に。

ソ連を後ろ盾に最新鋭の兵器を備えるイラク軍の蹂躞を面白く思わないアメリカは、経済制裁を科しつつも秘密裏

にイランに対して武器弾薬等を供与していた事が戦後判明する。

1988年、国連決議による停戦を受諾して終結。）

明け方、空が白み始めた頃、ルパンは道を外れた砂と岩山と僅かなペンペン草しかない乾燥地帯のど真ん中で

車を停めた。

「おいおいルパン、こんな所で何する気なんだ？ なんにもないじゃないか」

次元が周りを見渡しながら聞く。

「あるよ、ここに」

そう言つてルパンが片足をかけたのは石組みの井戸の口だっ

た。

「なんだよ、ただの井戸じゃないか」

「これで水に困らんといいわけか」

「五右エ門の言うことももっともだが、それだけじゃねんだぜ」

ルパンは身動きのとりずらい昼の間、カナート（地下水路）の中で身を隠していようと考えていた。

砂色のシートで車を覆い隠し、牽引フックに引っかけたロープを垂らして井戸からカナートの中へ入る3人。

カナートの中は狭く、中腰で膝を曲げてかろうじて歩ける高さ、70〜80cm程度の幅しかない。

当然、井戸の付近以外は暗く、下には絶え間なく水がサラサ

ラと流れているが、そのせいで気温が低く、灼熱の
地上とは雲泥の差の快適さだ。

携帯の折り畳み椅子に腰を掛けて一服つける次元。

「なるほど、さすがだぜルパン。ここなら水に困ることもねえし、なにより涼しくていいや」

「ちと窮屈ではあるがな。ところでこの水路はずっと続いて
いるのではないのか？」

「その通りだよ五右エ門。この地下水路はイラン中至る所に
ある。」

しかし全部繋がっているわけじゃないし、どこへ続いている
かも分からない。

人が入れる大きさの水路ばかりじゃないしね」

「なんだ、じゃあこれを伝ってタブリーズまで行くんじゃない
えのかよ」

次元は少々がっかりした様子。

「無茶言うなよ次元、ここからタブリーズまで少なく見積も
っても1,300Kmはあるんだぜ。」

車を使わなきゃ無理だって」

「いずれにしろお主、何故にタブリーズへ向かうのか、その
理由を語ってもらおう」

「ああ、そうだったな。」

前にマルコ・ポーロが長期滞在したのは3ヶ所だって言っ
たのは憶えてるよな」

「無論だ」

「だがあれは除外するって言ったじゃねえか」

「あれはあくまで東方見聞録の本編の中だけの話なんだよ」

「と言うと・・・？」

「実は序文を含めるともう1ヶ所あることが分かるんだ」

「それがタブリーズだと言うのか」

「そう。」

マルコ・ポーロは、タブリーズへは東方見聞録の本編の中で中国へ向かう際一度立ち寄っているが、序文では

ベネツィアへの帰路、コカチン姫を送ってもう一度寄っていて、しかも9ヶ月滞在したとある。

だがその滞在理由は記されていない。

さらに、不二子の持ってきたマルコの叔父マフェオの遺言状（1310年2月6日付）によると、マフェオの従僕

マルチェットがタブリーズで死亡している。

またそこで、相当額の金銭的損失を出したことも記録されているんだよ」

次元いわく、

「なるほど、タブリーズで9ヶ月滞在し、財宝探しをやったが盗賊団に仲間を殺され、逆に金品を奪われた。

ミイラ取りがミイラになっちまった、ってわけだ」

五右エ門が言う。

「理由は分かったが、タブリーズへ向かうのならわざわざイランを縦断せずともトルコから入った方が近いはずで

あろう。

いくら戦争のせいでトルコが国境を封鎖しているとはいえ、遠回りし過ぎではないのか」

これにルパンが答える。

「途中でケルマーンへ寄るのさ。」

山賊カラウナスの伝説も財宝と関係があるかも知れんし」

そして翌晩、移動を開始した一行はケルマーンを過ぎ、レオバル平原に差しかったところの小高い丘の中腹で

廃墟を発見した。

岩陰に車を停め、懐中電灯を手にさっそく調べ始めた3人。

廃墟は土レンガで作られた壁の一部が残っているだけで、屋

根は崩れ落ちており、その大部分は砂の下に埋もれてしまっている。

暫くして次元が尋ねる。

「どうだルパン、なにか分かったか？」

「いや、こう暗くぢやな・・・」

「夜明けを待つか」

「そうだな・・・」

そこへ突然、何処からともなくパパパンと数発の乾いた銃声が聞こえてきた。

咄嗟に電灯を消し、窪地に身を隠す3人。

「な、何者だ、いきなり！」

と文句を言う次元。

「どうやら向こうの道の方から撃つてきてるようだ」

五右エ門の言う通り、300m程離れたところにある道の方から何かを言い合う人の声らしき音が聞こえる。

そこへ再び連続した銃声が鳴る。

「こりや自動小銃だな」

窪地に仰向けで寝転び、近場で弾ける銃弾を気にしながら、

次元は音で相手の銃の種類を判別する。

「ちえっ、イラン軍に見つかっちまったか。」

「何でこんな所にいるんだよ・・・、移動中かな？」

「どうするよ、ルパン」

「どうするって、あんまり関わりたくないんだよな・・・」

頭をかいて困惑した表情を浮かべるルパン。

「ルパン、考えてる暇はないぞ。 なにか聞こえる」

五右エ門に言われて次元が双眼鏡を取り出して覗いてみると、遠くの暗がりの中で戦車が一両、こっちに向かって

キヤタピラの軋む音を立てながら方向を転換させている様子が見えた。

「ありやりや、やべえぞ、あれはパットン・・・M48だ」
「戦車か」

「あゝあ、せっかく事を荒立てずに済まそうと思ってたのに・・・」

「こうなつたらしょうがねえだろ、やっぱ用意しといて良かったぜ」

そう言つて次元が重そうに取り上げたのは対戦車ライフル、シモノフPTRS1941。

次元はライフルに弾を込め、射撃の体勢をとる。

「赤外線スコープ付けといて正解だったな、まあ、パットンじゃこの距離でも貫通させるのは無理だろうけどな」

「ならば・・・」

すつくと立ち上がる五右エ門。

「次元、援護を頼む」

「おうよ、まかしとけ」

「ルパン、お主は車の用意だ」

そう言い残して五右エ門は足音も立てずに走り出して行った。

「おーおー、五右エ門のやつ気合い入ってんなー」

「腹減つてるんだろ。」

おいルパン、おめえもさっさと車の用意した方がいいぜ。

でないと朝めしが食えなくなっちまう」

イラン軍の兵士が数人、交替で散発的に自動小銃を撃ちながらじわじわとルパン達の方へ近づいてくる。

その間も戦車はゆっくりと移動し、砲撃の準備を整えつつある。

次元はサイトを覗きながら、大きく迂回して戦車に向かって
いるであろう五右エ門を援護するため、戦車の近くに

停車しているイラン兵が乗っていた装甲車目掛けて射撃する。

ズドン！

装甲車は戦車より装甲が薄いため、旧式の対戦車ライフルでも一発で撃ち抜ける。

見事にエンジンルームをブチ抜かれた装甲車は爆発し、更に燃料タンクと積んでいた弾薬へ誘爆を引き起こす。

突如反撃され爆発炎上する装甲車、側に残っていたイラン兵数人が慌てて逃げ出す中、一人五右エ門が戦車の前に

飛び出し、斬鉄剣を居合いのごとく一気に抜くと戦車の砲身をスパンと斬り落とす。

次に、そのまま戦車の上に飛び乗るなり車載のマシンガンを切断、戦車の武装を完全に使用不能にした。

突然のことに驚き、慌てふためいて辺り構わず銃を乱射するイラン兵達を余所に、五右エ門は戦車からジャンプ。

そこへ、まるで計ったように見事なタイミングで暗闇からヘッドライトを点けずに現れたルパンと次元の乗る車に

飛び乗り、再びどこへともなく闇の中へ姿を消し去った。

それから数日。

その後も何度かイラン軍部隊とのニアミスを繰り返すも戦闘を回避しつつ、どうにかこうにかタブリーズの近く

まで辿り着いた。

最前線に近いせいか、昼夜を問わずイラン軍のF4戦闘機が上空を飛び交い、砲撃の音が時折遠くで聞こえる。

軍人の数も上陸した頃に比べて格段に多く見かけるようになっていた。

明け方近くになってようやくメモの記述にあった通り、タブリーズの南西約70Kmにある岩山に廃墟を発見し

調べてみたものの、それがいつの時代の廃墟なのかも分からない。

一息つけるルパンは、ふと足元にある物を見つけて拾い上げ、次元に手渡す。

「おい次元、見てみな」

それは一個の空薬莢だった。

「あゝ、これは7ミリ・・・7.62ミリだな、カラシニコフか」

「恐らくな」

「あいつらM16使ってなかったっけ・・・、何でもありが、この軍は」

「イラン革命の後アメリカはイランを敵視するようになったからな、表向きは。」

探せばその辺に5.56ミリも落ちてるんじゃないの？」

「何れにしろこの廃墟は最近のものであるという事なのだな」

「だが諦めるのはまだ早いぜ五右エ門。」

この山は他にも廃墟があるみたいだから探してみよう。

何せ700年以上前の廃墟を探そうってんだ、そう簡単に見つかりっこねえって。

でもその前にそろそろ不二子ちゃんに電話しとかないとな
」

ルパン達は山を下り、近場の村まで行くとそこから不二子の元へ電話をかける。

「あ、不二子ちゃん？ 元氣？ そっちはどうよ、快適なんだろうな・・・」

ところが、不二子の方から以外な言葉が返ってきた。

「何言ってるのルパン、そんな悠長なこと言ってる場合じゃないわよ、大変なことになってるんだから」

「大変って、何が？」

「銭形警部がトルコ国境を越えてイランに不法侵入しちゃったのよ。」

それでイランの陸軍当局に逮捕されてスパイ容疑でタブリーズへ移送されたのよ」

「なに？ 父つつあんが!？」

「テヘラン発の外電として各国で大きく報じられているわ。処刑は時間の問題よ」

「くそう・・・、こうしちゃいられん」

険しい表情を浮かべながら受話器を置いたルパンに次元が声をかける。

「ルパン、銭形を助けに行くのか」

「まあな、あれでも俺たちにとっちゃ長いつき合いだしな・・・」

・

「ふん、腐れ縁というヤツか」

「そう言うこつた」

次元も五右エ門もルパンの決定に反対しようとはしなかった。もちろん、これから行う行為、軍に拘束されて監視下にあるスパイ容疑のかかった人物を連れ出して解放しようとするのは明らかに軍に対する敵対行為であるため、ルパン達

自身も敵と見なされ、攻撃対象となるのを承知した上でそれに従った。

即ち、もし仮にルパン達が戦場で銃弾に倒れて死亡したとしても、それは民間人ではなくゲリラ兵かスパイとして扱われてしまい、何ら問題にならない事を意味している。

とどのつまりは、いつまでも戦場をうろつろしてはいられない、財宝探などしてはいられないということだ。

マルコ・ポーロの財宝探しは未完のまま終わらざるを得ないが、それよりも銭形の命を救うことの方が遙かに重要なのだ。

ルパン達はタブリーズへ急いだ。

「戦場にまで追いかけてくるとは、父つつあんも仕事熱心なことだ」

「まさしく、見上げた心意気だ」

車上で銭形の大膽不敵、と言っかあまりに向こう見ずな行動を皮肉る次元、そして讃える五右エ門。

だがルパンは、ハンドルを握りながら二人とは違う見解を示す。

「いやあ、確かに大した男だが、父つつあんは俺達を捕まえるために国境を越えたんじゃないさ」

次元と五右エ門にはその意味がわからない。

「ルパン、そりやどういう意味だ？」

ルパンは、パリで起きた殺人事件の事、ジャン・リュック少年と銭形の事を話して聞かせた。

「何だ、じゃあ俺達はずっと銭形に踊らされてたってわけか。ルパン、お前はいつからそれを知ってたんだ」

「俺が日本へ護送される時からさ。」

飛行機の中で父つつあんがやたらマルコ・ポーロの話をするんで、こりや何かあるってね」

「ううむ、銭形にそんな事情があるうとは・・・」

「チュニジアのホテルで俺がマルコ・ポーロは中国へは行つてなくて、コンスタンチノープルかソルダイアで商売

の修行をしていたのかも知れないって言っただろ。

あれは実は、殺されたアンリ・デ・シャンの意見だったんだよ。

きつと父つつあんもじつと待つてられなかったんだろぅな」
「では、お主は銭形に代わってその少年の希望を叶えてやるうとしておったのか」

「いんや・・・、俺は財宝を探してるんだよ。」

マルコ・ポーロが中国へ行こうが行くまいが、俺にとつち

やどつちでもいいことさ」

「へへ・・・、違いねえな」

五右エ門の質問に答えたルパンの言葉を聞いて次元はニヤリと笑った。

それがルパンの本音であると同時に虚言だと察知したからだ。五右エ門もそれに気付いたのだろう、目を閉じたまま無言で微笑んだ。

そんな二人を知ってか知らずか、ルパンは自分のマルコ・ポーロの研究を総括する。

「マルコ・ポーロは確かに尊敬すべき偉大な男さ。

でもそれは、本当か嘘か分からない大陸横断みたいな途方もない長旅をしたから偉大なんじゃない。

記録を残したこと、それこそが偉大なんだよ。

モーツァルトがどんなに天才でも、曲を残していなかったら誰もそれを知らず、評価する事も出来ないんだ」

朱灼けの砂漠に沈む夕日を横目に疾走する車、ルパンは一言呟いた。

「しかしこれで、暫くは財宝探しも出来なくなるだろうな・・・、戦争でも終わらん限りは」

タブリーズ郊外の捕虜収容所、有刺鉄線のフェンスで囲まれた敷地の中に、コンクリートで造られた平屋で小さな

部屋がいくつもある長屋のような建造物が二棟あり、銭形はそこに収監されていた。

深夜、突然、二人のイラン兵が銭形のいる房へ来ると、「出る」と一声発し、銭形の腕を掴み無理矢理連れ出そうとする。

驚く銭形。

「な、何をする！」

イラン兵の一人が変なアラビア混じりの英語で告げる。

「お前の処刑が決定した」

「何だと！？　ワシは何もしたらん！　裁判も受けとらんのに死刑とはあるか！」

大体ワシはICPOの銭形だ、スパイなどではないと何度も言っておるのに！」

「いいから黙って来い！」

銭形は抵抗するが空しく、挙げ句に目隠しをされて車に乗せられた。

数時間後、車から降ろされ、目隠しを外された銭形が見たものは、既に国境を越えたトルコ国内だった。

「こ、ここは・・・」

一人のイラン兵が言った。

「処刑すると言ったが、死刑にするとは言っていない。お前は国外追放だ」

啞然とする銭形にもう一人のイラン兵が一通の封書を手渡しで言う。

「これを持って、どこぞへなりと好きな所へ行け」

一体何がどうなっているのか。

事態がよく飲み込めず、当惑する銭形をその場に残してイラン兵達は車で去って行った。

暫くポカンとその様子を眺めていた銭形は、ふと手に持たされた封書に気がついた。

開けてみると、そこにはマイヤー邸で盗まれたマルコ・ポーロのメモの写しが入っていた。

そこでようやく銭形は事の次第を理解してニヤリと笑った。

「ルパンめ、手の込んだマネしおって・・・」

朝日を浴びながら、銭形はゆっくりとタバコに火を着ける。

フランス 雨上がりのパリ市内

人通りのない街路を一人でとぼとぼ歩く少年。

その表情は暗く、陰鬱としていて虚無感すら漂わせていた。

いつしか少年は、いつものようにパリ18区のモンマルトル墓地を訪れ、一つの墓石の前に立ち止まった。

そこで少年は、雨露に濡れてキラキラ輝く真新しい花束が墓前に供えられているのを目にする。

誰か、父の友人が来てくれたのかと思っていたと、

「この墓地には、ドガやハイネの墓もあるんだってな」

突然、後ろから声をかけられ、振り返る少年の目に見知らぬ一人の男の姿が映った。

「おじさん、誰？」

「なあに、銭形の知り合いでルパン三世っていうケチな泥棒さ」

「ルパン・・・、ってあのルパン三世！？」

その言葉を聞いたジャン・リュック少年はたちまち激しく興奮していくのを感じた。

全身にアドレナリンが一気に流れ込み、足の指の先まで血が通っていることを実感し、髪の毛が逆立つような錯覚

まで覚えた。

あのルパン三世が、世界中の警察が血眼になって追いかけても決して捕まえることの出来ないあの男が、自分の目

の前にいる。

そして銭形の依頼を受けて、父の説が正しい事を証明しに来てくれたのだと。

ジャン・リュックはそれまでと一転して天にも昇る高揚感に包まれた気分を味わった。

もはや向かう所敵無しだ、なにしろルパン三世に不可能などないのだから。

少年は意気揚々とルパンに尋ねた。

「ルパンさんは、お父さんの説を証明出来るんですよね！」

「調べたよ、いろいろとね。イランへも行ってきた」

「じゃあやつぱり、お父さんは正しかったんだね！」

「おっと待った、俺は財宝を探しに行ったんだぜ、マルコ・ポーロの財宝をね」

その言葉に少年は衝撃を受けた。期待した答えとはあまりに違う返事だったからだ。

ルパンの目的は違うところにあった。

父さんの説を証明するためではなかったのだ。

ジャン・リュックは戸惑い、そして落胆して途方に暮れた。

肩を落として俯く少年に近づいて、ルパンは声をかける。

「君の父さんの論文も読んだよ、面白い意見じゃないか。

でもはつきり言つて、俺は君の父さんの説を証明出来ないし、する気もない。

君の父さんの説は非常に興味深いし、研究し甲斐のあるものだと感じる人もいるだろう。

けど現時点ではそれを証明するには史料が足りないというのが実情だ。

残念だろうけど、それが事実だよ」

「・・・・・・」

「700年も前にいた人間が何をしていたかを正確に調べる

なんて並大抵の事じゃないんだぜ。

マルコ・ポーロより200年も後に生まれたレオナルド・ダ・ヴィンチでさえ、その生涯が完全に明らかに

なっているわけじゃないんだ。

あんなにいろいろ絵やら何やら作品を残しているのにだよ。それに比べたらマルコ・ポーロはたった一冊の本しか残していないただの商人だ。

つくづく君の父さんは難しいテーマに手を付けたもんだと思うよ。」

少年は俯いたまま一言も発しなかった。

しかしただ俯いていたわけではない。

少年はルパンの言葉を聞いて、以前父親が同じようなことを言っていたのを思い出した。

たしか父親はその時こんなことも言っていた。

「だからこそやり甲斐がある。

歴史の中に埋もれている謎を解き明かすのは、ミステリー小説を読むより面白い。

なぜなら答えは本に書いてないから、自分で見つけ出すものだから……」

その言葉を思い出した時、少年は小さく微笑んだ。

ルパンはその微笑みを見逃さなかった。

「それでも、どうしても父さんの説を証明したいって言うなら、自分自身の力でやるんだな。

他人の力に頼らずにね」

「でも……、僕はまだ子供だから……」

「大丈夫、世間の人は君が大人になるまで待つてくれると思うよ。」

俺の集めた資料は全部君の家に送つといたよ、参考になれ

ばいいけどね」

この言葉を受けて少年の顔に生気が満ちてきた。複雑な気持ちではあったが、未来に希望がない訳ではないことを教えられたような気がした。

ジャン・リュックは顔を上げた。

「うん、僕やってみるよ。」

ありがとう、ルパンさん」

ルパンと別れて少年が墓地の出口へやってくると、そこへ向こうから銭形が下を向いて重い足取りで歩いてくる

姿が見えた。

今の銭形にとって、ジャン・リュック少年と会うこと程心苦しいものはない。

少年の希望を叶えようとせつかくルパンまで担ぎ出したのに、あろうことか自分の失態で全てをフイにして

しまったのだから無理もない。

それでも銭形は少年に会わねばならない、会って事情を説明する責務を負っているのは他ならぬ自分である。

しかし何と釈明すればよいのやら。

銭形は思い悩みながらアンリ・デ・シャン氏の眠る墓地へと向かっているところであつた。

「あ、銭形さん」

ジャン・リュックに声をかけられた銭形は、その思いの外元気な声に驚いて顔をあげた。

「ルパン三世が来てくれたんだ」

「何！？ ルパンが！」

「うん、僕は大人になったら歴史学者になって、父さんの説

を証明するんだ」

そう語る少年の顔は、まさにこの雨上がりのパリの青空のごとく清々しく、瞳はどこまでも澄み渡っていた。

『アンリ・デ・シャン氏殺害の犯人捕まる』

カフェでル・モンド紙の小さな見出しを眺めるルパン。

「今度は中国を搜索するか」、五右エ門の声。

「やめとくよ。それはいつか、あの坊やがやってくれるかもな・・・」

終

（後書き）

読んでいただいております。

こんな長い文章を書いたのは生まれて初めてですので、下手くそで、自分の頭の中にあるものがどこまで伝わっているのか分かりません。言葉足らずの部分や誤字脱字等いろいろあると思いますが、ご理解下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4941e/>

ルパン三世 マルコ・ポーロの研究

2010年10月9日18時40分発行